

八月九日入隊せよ！

福岡市西区 長谷川 俊道

『8月9日チチハル教育隊に入隊せよ』の通知書を受け取ったのは、昭和20年7月30日のことでした。当時私は、学徒動員で旧満州国錦州省阜新市の満州炭鉱阜新炭鉱で石炭増産の一員として、坑内労働に従事していました。採鉱科の同期生10人と共に、会社の宿舎である芙蓉寮で生活していたのです。私の他に堀川光治氏、森宗孝氏、黒田敏行氏も同時に通知を受けました。ただし、堀川、森両氏の入隊先は遼陽の教育隊でした。

私達は、戦時になって制定された陸軍特別甲種幹部候補生に志願して合格していました。当時の学生は、特甲幹、航空見習士官、海軍予備学生のいずれかを志願するのを当然のことと思っていました。その頃、沖縄では日米の総力を賭けた死闘が展開されていましたし、本土防衛は至上命令でした。8月6日には広島に初めて原爆が投下されようとしていた終戦直前のことです。

炭鉱主催の送別会や、同僚の壮行会等であわただしい3日間を過ごして、私達4人は阜新駅より奉天の母校に向いました。当時の南満州鉄道では、乗車券も制限されていましたが、私達は入隊通知書があるのでその心配はなく、列車の中もゆっくりしていました。学校（旧満州国立奉天工業大学）の寮はがらんとしていました。一部の学生は講義がありましたが、ほとんどの学生は動員で昼間は学内にいません。私は布団や書物等の私物を荷造りして、8月7日に奉天駅より小荷物便で福岡の父母のもとへ発送しました。（荷物は届きませんでした）

入隊前日の8月8日午後、奉天発ハルピン行きの列車に乗ったのは前記黒田氏、小松和太郎氏と私の他にもう一人で4人でした。列車の経路は奉天→四平→白城子→チチハルです。ハルピン経由は遠廻りになるので、四平で乗り替えることにしていました。四平には18時頃着いたと記憶しています。チチハル行の直通列車は翌朝7時なので、四平で一泊する予定です。四平の街は初めてでしたので、市内で夕食をとり駅舎に帰りました。ホテル代を節約するために待合室のベンチで夜明けを待つことにしたのです。だが事情を知った駅員さんと駅長の好意で貴賓室のソファで眠ることになりました。日本人の学生であること、しかも明日は入隊ということで餞（はなむけ）の気持ちであったのでしょうか。

8月6日広島に投下された原子爆弾について、当時の新聞は、「新型爆弾投下さる！熱線爆弾か？」と、大きな活字を一面に躍らせていましたが、原子爆弾の文字は見ませんでした。対策としては、防空壕を強化すること、裸身をさらさぬこと、衣服の重ね着をすること等が書かれていました。

静かに四平の夜は更けて行きましたが、突然空襲警報のサイレンと駅の非常ベルに起こされました。時計を見ると夜半過ぎです。またB29の空襲だと思いながら、「駅舎の外に避難して下さーい」と叫ぶ駅員の声に従って、少し離れたビルの蔭に走り込みました。30分位で警

報解除となり、駅舎に帰って仮眠を取ることができました。目を覚ますと、8月とはいえ大陸の朝は冷え込んで、朝もやがかかっていました。朝食は昨日買っておいた饅頭と熱いお茶ですませました。そして早速発車準備中のチチハル行急行列車に乗り込みました。四平よりチチハルまで約400km、約5時間の行程です。正午にはチチハルに着いて、バスで部隊に行けば13時頃には入隊手続をすませる計算でした。

四平を定時に発車して10分位走ったでしょうか、車掌の巡回があつて、ソ連が対日戦に参戦したこと。昨晚の空襲はソ連機であつたこと。萬州里、黒河、牡丹江省の3方面よりソ連軍は満州領内に侵攻していること、行先を変更される方は次の停車駅で下車して駅員に相談すること、四平に戻る次の列車は〇〇時頃です等を口早に説明して次の車輛へ行きました。私達はソ連の参戦は全く予想外の出来事で驚きましたが、行き先を変更する等もつての外でした。みんな好機到来、勇躍死地に赴かんと武者振いするような緊張感で興奮していました。今思えば、それが当時の青年として当然のことでしたが、現在の思想信条からすると、その時の態度を素直に評価することはできないでしょう。幼いときからの教育と社会環境とが、人の価値判断と行動の規範をいかに律するか、今深く思い知らされています。

チチハル駅に予定通り到着しましたが、そこにも異様な光景が待っていました。駅の周囲は荷物を背負い子供の手を引いた現地住民が二重三重に駅舎を取り囲んでいました。対峙するのは憲兵の腕章をして抜刀した士官が指揮する軍隊です。兵は着剣した銃を腰のあたりに構え、いつでも発砲できる態勢のようです。「列車に乗せろ！」という群衆と「静かにしろ！」と言う警備の間で、一触即発の状態でした。これでは到底入隊はできないと思い、駅長に頼んで教育隊に連絡をしてもらいました。程なく助役さんが来られて、本日の入隊は受け付けたこと、明日、軍よりトラックをさし向けるので入隊すること、それまでは駅長さんの指示を守ること等でした。その日長崎に2発目の原爆が投下されたことなど、知る由もありませんでした。現地人の間ではその頃、日本の敗戦を必然のことのように信じていたのかも知れません。

8月10日朝、迎いのトラックに乗って入隊しました。駅の周りの秩序は取りもどされていましたが、道路は人と馬車で大混雑でした。列車も鈴なりの状態で運行されていました。兵営はチチハルの市街を見下せる高台です。私達は早速軍服に着替えました。伍長の襟章はとても輝いて見えたものです。特甲幹の候補生は入隊と同時に伍長に任官するのです。そして13日に兵営を出陣するまで、手榴弾投擲、匍匐（ほふく）前進と突撃訓練ばかりをやりました。12日には、あのチチハル駅が黒煙を上げて炎上するのが見えました。そしてその夜、各人で毛髪と爪の遺品を作り肉親宛の封筒に入れて班長に預けました。これで俺の人生も終わりだ、と思う気持ちと悲壮感はありましたが、絶望感はありませんでした。今思っても不思議なくらい冷静でした。軍人として多くの戦友と一緒にいることや、本当の戦場を知らないと言うことだけでなく、死生感が現在と全く異なっていたと説明するしかありません。

8月13日、兵営を出発した部隊はコウコウケイの駅の周りで塹壕掘りを始めましたが、程なくハルピンへの転進命令を受けました。ハルピンで18日武装解除、牡丹江の収容所で10

月末までテント生活。その後2000人構成の貨物列車でシベリヤに入りました。2年間の収容所生活の後、ナホトカより舞鶴上陸、復員は昭和22年10月29日でした。

戦後も50年経ちましたが、青春時代の苛酷な記憶は昨年のことのように浮かんで来ます。平和の有難さと平和を守って行くことの大切さを誰よりも身にしみて感じているこの頃です。